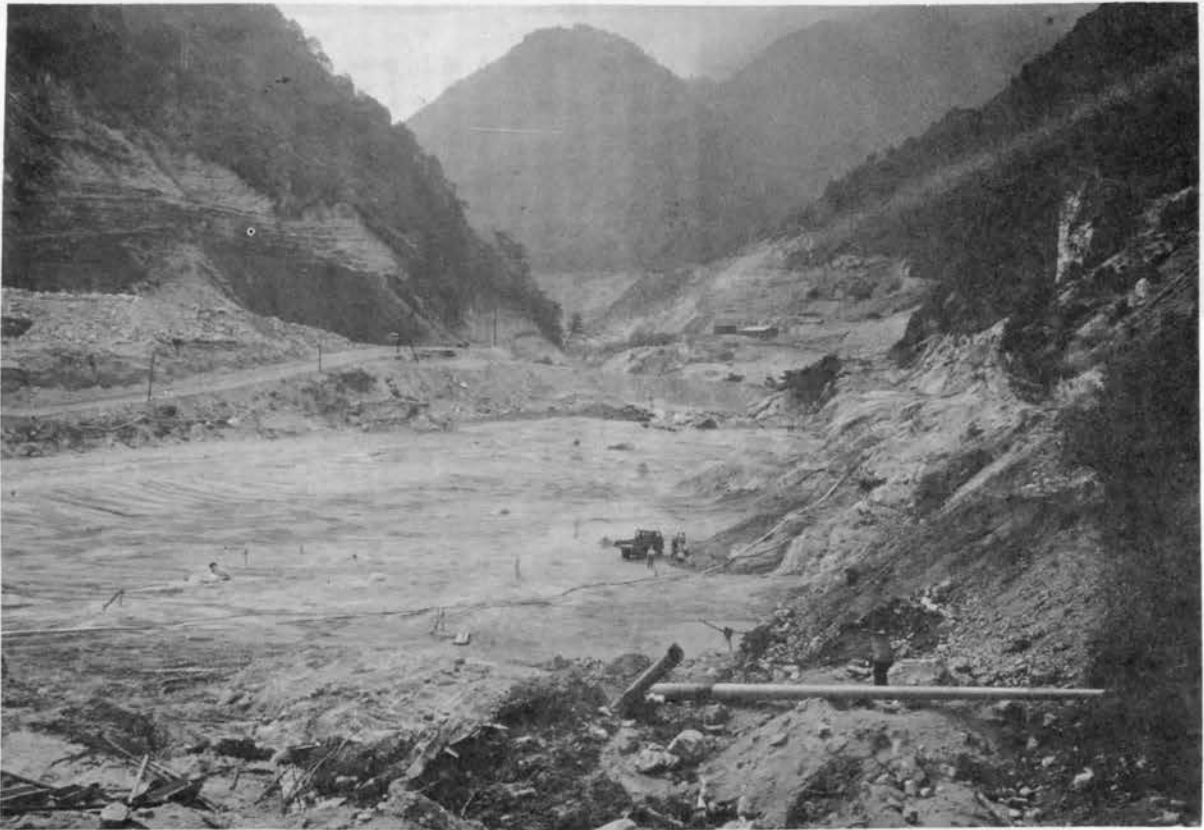


# 山と博物館

第18巻 第2号

1973年2月25日

大町山岳博物館



高瀬渓谷 七倉ダム建設現場

47.9.12

撮影 山本 携挙

## 近日雑感

岡沢 正義

▼「近づく神の罰あたり。」これは、「仲の良いのもいいが、ほどほどにせよ。そうでないと何かの動機で仲たがいたときは、裏切られた思いが強く、心の傷はいやしがたくなる。」という祖母のつねづねの教訓であった。これと山好きとを結びつけるのもどうかと思うが、このごろの山社会には、心あるアルピニストを欺かせることが多すぎる。昨秋、高瀬渓谷の破壊状況を視察して、山岳総合センターに帰着、お茶を飲んでいたときである。窓口に三人の山男が訪ねてきた。針ノ木岳から般窪岳まで縦走し、かつて見た高瀬渓谷の紅葉にあこがれ、七倉へ下りた。ところが、昔の面影やいまいずこ、あのダム工事現場に遭遇したのは、実にショックだった、というのである。これを「近づく神の罰あたり。」というのは酷である。が、いまや、昔ながらの山や渓谷は、ほとんど失われているのである。変容は、人情、風俗ばかりではない。そう思っていたほうがショックも小さくてすむ。まことに口惜しいことではある。

▼ふるさととは遠くにありて思うもの  
自然は遠くにありてながめるもの

対句のつもりで、こうは並べてみたものかどうか、自然は、遠くはなれてながめても、かならずしも美しいとはかぎらない。荒々しく削りとられた山肌もあらわに、スパー林道が走り、あるいは、針葉樹と広葉樹との複合原生林が、いつのまにか三角形に、矩形に伐採されてはげ山となり等々。冬は積雪でおおわれ、まさに神々の座の深遠さを思わす山が、夏は傷だらけの半身となる。長男が幼児のころ、戸隠有料道路ビーナスライン建設工事中の地附山を指さし、「お山が泣いてるよ。」といったことばの適切さと思う。

(長野県山岳総合センター所長)

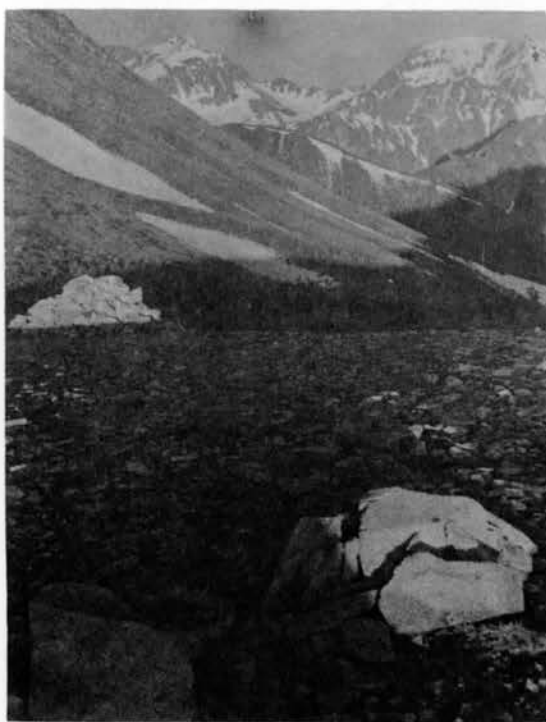
# 高山蝶

田淵行男

夏の登山の大きな楽しみの一つに御花畑の美観があることは一度高山に登った人の一致するところであろうが、その天上の花園に舞い遊んでいた蝶の姿も必ず深い印象を植えつけたはずである。一体動物の姿は草木とは又別で、ひとしお興味をひき、和やかさを感じさせるものであるが、然し高山の動物となると種類も数も少なく、普通では仲々めぐりあえないものである。此頃ではカモシカなどには無論のこと、雷鳥にであえれば稀な幸運といつてよい位である。してみればお花畑の蝶の姿こそ高山の動物として最も一般的なものととってもよいであろう。

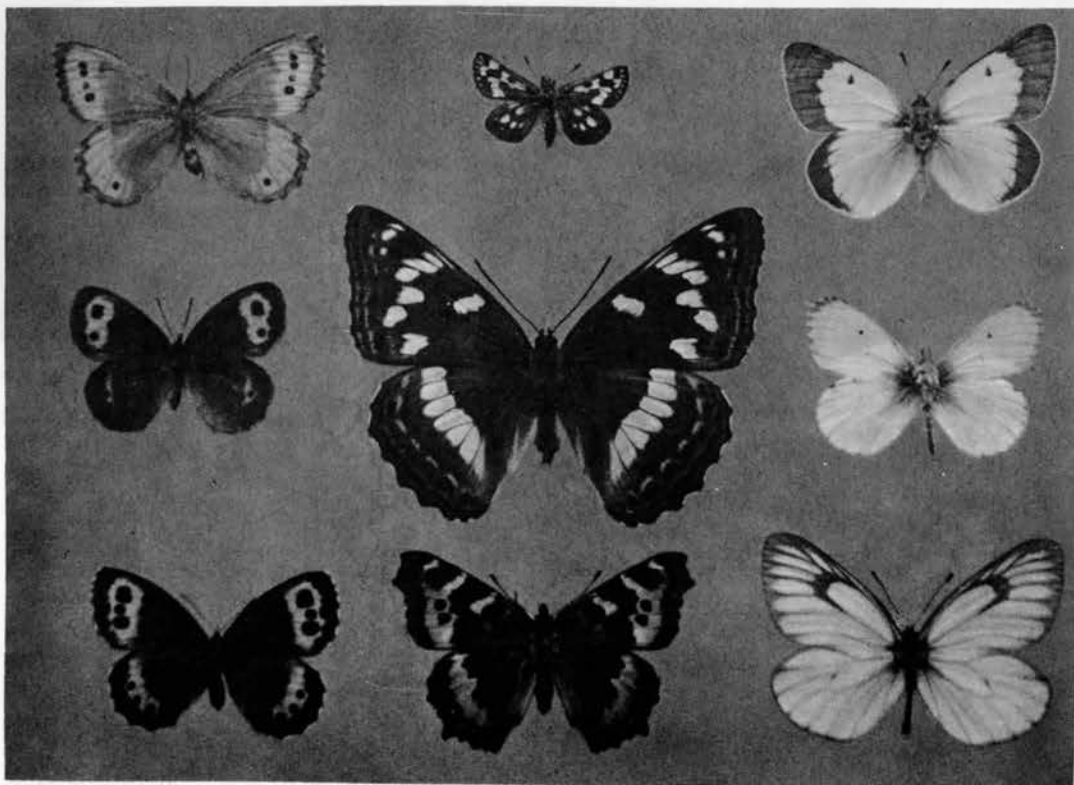
の平地族がまじっている。避暑としやれこんだわけでもあるまいが、これらのいわばもぐりのにせ高山蝶は種類ではざつと十種位もあり、お花畑を我物顔にとびまわっているの一般の登山者には本物とまぎれやすく厄介である。

一体、高山蝶という言葉の定義内容は高山植物という言葉と同様にはつきりしているようである。その実内容の不正確な言葉である。一応高山に定着しているものということになつていながら、高山そのものの境界が不明確であるし、個々の種そのものの棲息にもかなりの高度差がある。然し、何れにせよ高山蝶という呼名の根拠は高山に生活の根を下しているという生態上の特色にあることに間違いなく、その意味で先にのべたにせ高山蝶の平地族は一時的に高山に姿をみせただけのことでその生態上明確に区別できるわけである。以上で高山蝶のジャンルは一通りであるが、実際個々の種



タカネヒカゲ・ミヤマモンキの棲家(常念乗越)

タカネヒカゲ・ミヤマモンキの棲家(常念乗越)の平地族は一時的に高山に姿をみせただけのことでその生態上明確に区別できるわけである。以上で高山蝶のジャンルは一通りであるが、実際個々の種



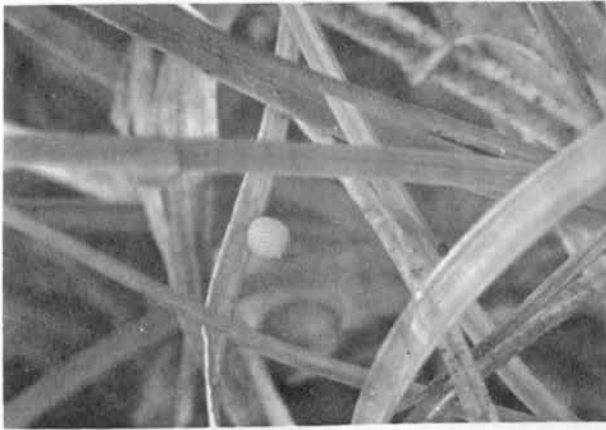
(左列)  
タカネヒカゲ  
ベニヒカゲ  
クモベニヒカゲ

(中列)  
タカネキマダラセセリ  
オオイチモンジ  
コヒオドシ

(右列)  
ミヤマモンキチョウ  
クモツマキチョウ  
ミヤマシロチョウ

類につき生活内容を考えてみるとかなりな違いがある。例えばタカネヒカゲは二千四、五百メートル以上のハイマツ帯を棲家としてそれ以下には絶対に姿をみせぬが、クモツマキチョウは高い方は二千四百メートル位から

低い方は四、五百メートルにまで及んでいるなど極端な例である。私はよく高山蝶とはどんな蝶か、平地のものとのとんな違いがあるかとの質問を受けるが先に述べたようにこの仲間はその生態上の特



タカネヒカゲの卵 食草の結葉



タカネヒカゲ 翅を傾けて静止する

高山蝶のもう一つの特性はこれらの蝶が日光に非常に敏感なことである。注意している人は気がついておられると思うが、陽がかけるとあたりにとんでいたものがとたんに姿を消してしまう。これも生態的な必要性から身につけた習性とも考えられて面白いことである。つまり、場所が場所だけに天候の変化に鋭敏に対応するわけがこの点登山者も大いに学ぶべきことだと思われるのである。以上は成虫についてのことであるが、他の部分、つまり幼虫や蛹の時期については大きな違いがある。その第一は生育速度が非常にゆるやかなことである。平地の蝶はその生活史の一環は長くて一年、中には一年間数回繰返すものも決して少なくない。ところが高山蝶ではその三種(タカネヒカゲ・クモマベニヒカゲ・タカネキマダラセリ)までがその生活史に満二年を費すのである。これは高山蝶の特性として特筆すべき事柄で平地族には絶対にみられない習性である。こうした特性の原因はと

微からの呼名であるから、一見それとわかる外観上の区別点などあるわけではない。これを知るには個々の種をおぼえこむより他はない。然し、生態面ではいろいろと変わった点が見受けられ、さすがは高山蝶なるかと感嘆させられる。以下、高山蝶の真骨頂とも考えられるそうした現地での生態に重点をおいてその生い立ちを眺めてみよう。

夏山で誰もお花畑の美しさに目をみはるが、その百花一時に咲き揃い姫を競う姿に実は高山のきびしい自然の必然性が結びついているところにまで思いをめぐらす人は少ない。つまり、高地の草花にとつては夏は短かく、開花結実には都合な適温季は平地とくらべものにならない。その結果短かい夏に集中して開花し、獨特の美観をあらわすのである。高山蝶もいかなればそれと全く同じ型を示し、その姿(成虫)の見られるのは極めて短かく、そのシーズンは七月、一月といつてもよいくらいで、一般に八月に入ると姿は急にまばらになってくる。



タカネヒカゲ 五令幼虫(左) 四令幼虫(右)

いうと先づ気温の低いことが考えられるが、私はこの点に關してクモマベニヒカゲを材料として実験を試みたことがあった。もともとこの蝶の自然状態での生活史の概要は、第一年目の七月末生みつけられた卵はその中に幼虫を入れたまま越冬、翌六月末蛹となり七月初成虫になる。つまり、通算満二年を要するのである。ところがこれを山麓で飼育すると、第二年目に幼虫は無制限に生育を続け、その年の九月に成虫になってしまうのである。結局その生育期間を半分に短縮してしまうのである。こうした変化の原因を気温のせいだけと考えることはできないが、少くとも気温が重要な要因になっていることはたしかである。高山が生活環境として平地と違っている条件には気温の他、湿度、気圧、風、日光(紫外線)の他、地形の峻しき、食料(幼虫の食草、成虫の蜜源)の少ないことなどで、何れも生活をきゅうくつにする悪条件である。その結果高山蝶は一般に平地種に比べてその個体数が少なく、その棲家も非常に限定されている。こ

のことは高山蝶中普通登山者の目にふれるものはいずれいベニヒカゲ、クモマベニヒカゲ、コヒオドリシの三種位に過ぎない点でも知れない所、いわば細々と暮らしているグループであることに加えて、此頃の登山の隆盛、観光事業、自然開発の進展につれてその棲家を奪われてその姿が大変少なくなってきた。世上よく心ない採集家の乱獲のせいといわれているがこれは一面の原因になっているかもしれないがその影響は前記の大規模な自然の改変にくらべたら問題にならないと思われる。何れにせよ貴重な自然物が年々勢を弱めていくのは惜しいことである。

タカネヒカゲは高山蝶中の高山蝶といつてよい程高山性を身につけた種類である。この蝶の好きな棲家は前記のように二千四、五百メートルのおおらかな尾根筋になっている。私はこれにハイマツ仙人という愛称をつけているが、この蝶の生活をみつめてみるとその成虫は無論のこと、その成虫のただづまいからもしきりにそうした連想が浮かんでくるの



タカネヒカゲのかくれ家

中央の石の下にかくれている

まわりのスゲは食草ヒメスゲ

この幼虫の姿には感銘深いものがある。元来この種の棲地はおおらかな尾根であるが、そうした地域の直面する気象条件として当然風当りが強いので多くは不毛の砂礫地帯となつていゝか、或は所々に岩層の間にスゲ類が細々と生えていたり、ハイマツ、タケカンバが懸命な低姿勢で大地にしがみついている。タカネヒカゲの幼虫はこうした所でヒメスゲなどスゲ類を食餌としている。といつても平地族のように食草中に身を置いていゝわけではなく、きびしい気象の変化にそなえるかに慎重に岩層の下の僅かな隙間に身を入れていゝ。従つてこの幼虫をみるにはそのかくれ家をあばくより手はない。そのかくれ家の石には平均して握り拳より少し大きい位のもが選ばれていゝ。

である。成虫の大きさはモンシロチョウよりやや小さく、その翅の色調は高山蝶の中で一番地味で、表は黄褐色の地に黒い輪状の小紋をのせているが、裏はがらりと趣を変え黒白黄褐のこまかいしぼり染めになつていて丁度雷鳥の夏毛に似た感じである。この淡い色調は当然保護色としての効果を發揮し、余程氣をつけていないとみづからない。静かにハイマツの下や石くれの間にうづくまつていて人が近づくと飛びたつ、然し、黄褐色の地味な装いのため、うっかりしている人には、それは枯葉が風でとんだものとまちがえられ勝ちである。事実尾根筋は風が強いので高くはとべず地上すれすれの所を風に流されていくことが多い。その際、静止した地点にしつかり見当をつけて静かに近づいていくとそこで異様なこの蝶の姿を見出して驚く。というのは翅を横に倒して静止しているからである。元来、蝶仲間には静止の際あわせたとて翅を静止面に対して直角に立てるのを原則としているが、この種に限りそれを破つていろいろな程度に

傾けていゝ。これはこの蝶の習性上見落せないことで、その意味は高山の強風下の生活に順応した姿、つまり、生態的な一つの適応と考えられていゝ。このようにこの蝶は虫とはいへば染めの衣ともみえる翅を身につけ、俗塵を避け高山の雲霧の中に霞を食ひ(花の蜜は殆んど吸わない)飄々として物事にこだわらない風格からハイマツ仙人のイメージはごく自然に生れてくるのである。



タカネヒカゲ蛹化の生態

七、八月頃であればそうした石の下に二センチ半位の五令幼虫がみつかるはずである。この幼虫には美しい紅色のものと黄土色のものがある。これらは翌年の六月、石の下で蛹になり七月始め成虫となるのである。つまり足掛け三年、高山の石の下で忍苦の生活を送るわけで、この姿から私には昔の修験者が山中にこもり苦行難行に心身を鍛え、又石の上に三年間も座ったきりできとりを開いた高僧の姿などが連想され、この高山蝶に益々ハイマツ仙人の名がふさわしく思われるのである。

北アルプスには本州に産する高山蝶全種類が棲んでいゝし、南ア、中ア、八ヶ岳、其他の高山にもその幾種かの姿がみられるが、年々非常な勢でその数量の減つていくのは残念である。常念乗越し、上高地、徳沢など昔は高山蝶の名所として私共には大きな魅力になつていゝが、此頃では当時をしのぶよすがもない。然し、高い峯に立ち、或は尾根路にザックを下して憩う時、遠い山々の大観に満ち足りた瞳を足元に移してこれら高山の小さな動物の姿を眺め、或は思う時登山は一段と楽しく和やかに、そして山は一段と豊かで美しくなることに間違ひはない。

本稿は昭和三十八年に書かれたものである。

**博物館だより**  
カモシカ大使は  
「木曾生」と「町子」  
日中交友のきづなとして大町市から中国の北京へ贈られるカモシカは「木曾生」と「町子」に決まりました。

「木曾生」は昭和四十五年五月二十四日、長野県木曾郡南木曾町の山林で生後一ヶ月くらいで保護され、七日間現地で哺育された後当館へ引取られ人工哺育によつて育てられました。「町子」は昭和四十六年五月二十日、当館で飼育中の「あつ子」から生まれました。雄親は人工哺育成功例第一号の「大助」です。二頭のカモシカは三月末—四月頃、上野動物園を介して、同園のフンボルトペンギン二つがいと共に羽田空港から北京へ向けて送り出される予定です。検疫は上野動物園へ検査官の出張を得て行いますので、羽田を発つ数週間前に大町から送り出されます。

ニホンカモシカが国外へ送り出されるのは今回がはじめてであり、二頭のカモシカには日中高国の交友親善のための動物大使としての期待が寄せられているだけに、隣国への旅立ちを前にして、当館としても二頭々の健康管理には特に注意を払つております。

山と博物館 第18巻 第2号  
発行所 長野県大町市TEL(026)211-1111  
印刷所 大町市下町山岳博物館  
大町市大町山岳博物館  
大町市大町山岳博物館  
定価 年額 四〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野一三、二九三)